

ワーニャ伯父さん

原作

A・チャーホフ

構成・演出・美術

鳴海康平

出演

木母千尋

菊原真結

諏訪七海

桑折 現

山形龍平

梶田航平

西内仁美

加賀志郎

立ち止まってしまったとき、
残された時間は長くはないと気づく。
遠くにかすむ過ぎ去った時間を振り返りながら、
使い古した靴で、その男はまた歩きはじめ。
乾いた足下をぼんやりとながめながら。

舞台監督:北方こだち

照明:島田雄峰(LST)

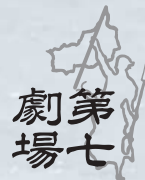
音響:平岡希樹(現場サイド)

アダプテーション:鳴海康平

フライヤーレイアウト:橋本純司

チャーホフ戯曲の中でもっとも美しいとされる台詞を持つ「ワーニャ伯父さん」。
2019年に三重県文化会館で初演され、韓国、金沢、宮崎で上演された作品が、6年ぶりに三重再演。
永遠に失われてしまった誠実に思いを巡らせる物語。

上演台本作成にあたり、神西清、浦雅春、Françoise Morvan、Andre Markowiczの各氏訳を参考にさせていただきました。



ワーニャ伯父さん

1899年にモスクワ芸術座で初演されたチャーホフ四大戯曲のひとつ。大学教授夫妻が前妻が残した領地を訪れ、立ち去るまでの物語。人生の半分以上を姪ソーニャとともに領地を管理し、教授に奉仕してきたワーニャは、教授への失望とともに自分の人生の浪費に絶望する。そのワーニャを慰めるソーニャの言葉は、チャーホフ戯曲の中でもっとも美しい台詞として知られる。

第七劇場

1999年、演出家・鳴海康平を中心に設立。主に既存戯曲を上演し、言葉の物語のみに頼らず舞台美術や俳優の身体とともに多層的に作用する空間的なドラマが評価される。国内外のフェスティバルなどに招待され、これまで国内25都市、海外5ヶ国11都市(フランス・ドイツ・ポーランド・韓国・台湾)で作品を上演。代表・鳴海がポーラ美術振興財団在外研修員(フランス・2012年)として1年間滞仏後、2013年に日仏協働作品『三人姉妹』を新国立劇場にて上演。2014年、東京から三重県津市美里町に拠点を移設し、倉庫を改装した新拠点 Théâtre de Bellevilleのレジデントカンパニーとなる。
<https://dainanagekijo.org>



「ヘッダ・ガーブレ」 三重県文化会館(2024) ©松原豊

2025
10.4 (土) 14:00開演 / 18:00開演・**5** (日) 14:00開演

各回終演後に、演出家によるトークセッションあり ※受付開始は開演の45分前、開場は30分前 ※上演時間は90分を予定

MIE CENTER FOR THE ARTS
三重県総合文化センター

三重県文化会館 小ホール

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234

○近鉄名古屋線・JR紀勢本線・伊勢鉄道「津駅」西口より 徒歩約25分／三重交通バス約5分 ○伊勢自動車道「津IC」より車で約10分／「芸濃IC」より車で約15分

整理番号付き自由席 一般3,000円(当日3,500円)・22歳以下1,000円(前売・当日ともに)

※未就学児の入場不可 ※22歳以下チケットでご入場の際は、年齢の確認できる証明書のご提示をお願いいたします。

8月2日(土)10:00より発売開始

三重県文化会館 チケットカウンター(窓口・電話) TEL059-233-1122(10:00~17:00/月曜または月祝翌平日休館)

三重県文化会館 WEBチケットサービス「エムズネット」 <https://p-ticket.jp/center-mie/>

第七劇場WEB(予約のみ) <https://www.quartet-online.net/ticket/vania25>

 10月5日(日)14:00の回のみ託児サービスがございます。(先着順・有料) 公演の2週間前までに三重県文化会館へお問い合わせください。

主催:三重県文化会館[指定管理者:公益財団法人三重県文化振興事業団]

助成:公益財団法人岡田文化財団、文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

製作:合同会社 第七劇場

